

トカラ列島・中之島における冬期の鳥類調査

山元 幸夫*

Ecological Survey of Birds in Winter in Nakanoshima, Tokara Islands

Yukio YAMAMOTO

はじめに

トカラ列島は、屋久島と奄美大島の間に、約150kmにわたって連なる10余の小さな火山性の島々からなっている。温帯から亜熱帯への気候区分の移行帯であると同時に、生物相の急変地帯としても知られ、古くから内外の研究者の注目するところであった。しかし、鳥類に関しては長い間手つかずのままで、やっと1980年頃から調査が始まった。近年、専門家による調査や野鳥愛好家による観察が増え、次第に鳥相が明らかになりつつあるが、まだ未知の部分が多く残されている。特に、トカラ列島の冬の鳥類については報告例が少ないようである。

鹿児島県立博物館では、昭和63年度からトカラ列島の調査・資料収集活動を重点的に続けている。その一環として、筆者は1997年1月12日、13日の2日間、中之島での鳥類調査の機会を得たのでその調査結果を報告したい。

1 調査地の概要および調査方法

中之島は、周囲28km、面積27.5km²のトカラ列島中最大の島で、輝石安山岩などを基盤とする火山島である。島のほぼ中央部の標高230m付近にわずかに平坦地があるだけで、北半分は御岳(979m)、南半分は標高400mを越える山々によって占められている。山々のいたるところに代償植生のリュウキュウチク林が形成され、島の面積の約4割を被っている。ここでは、和牛の放牧が行われている。リュウキュウチク林を取り囲むようにしてスダジイなどを主とした照葉樹林が形成されている。山から海にかけての急峻な断崖一帯には、クロマツ群落のみられる。港に近い海岸沿いには集落があり、この周辺ではクロマツに混じりタブノキやビロウなどがみられる。

本調査は、おもに島の南半分について行った。センサスルートを1つ設けた他、自動車で数カ所の観察点を移動しながら出現した種をすべて記録した。ラインセンサス調査は、1997年1月12日、午前7時30分～9時の約1.5時間、船倉集落の役場支所から高尾集落の十島村総合開発センターに至る道路に沿って、距離約2.5km、両側50m幅で実施した。このルートには、ビロウやガジュマルが優占するモクタチバナータブ群落、リュウキュウチク群落、ヒロハネムが優占するウラジロエノキアカメガシワ群落、クロマツ群落、スダジイ群落などがあり、鳥類の生息環境が小刻みに変化するところである。定点観察は、1997年1月12日午後から13日にかけて、池原の底なし池(御池)、高尾のトカラ馬牧場、ヤルセ灯台、椎崎牧場、それにヤルセ灯台の南西約1kmの沖合にある周囲約500mの平瀬と呼ばれる岩礁で行った。この岩礁での調査目的は、カツオドリの繁殖を確認

することにある。底なし池（御池）周辺にはスダジイの照葉樹林が形成され、水辺にはヒトモトスキが生い繁っている。高尾の牧場周辺は平坦地になっており、リュウキュウチク林や農耕地が点在している。ヤルセ灯台や椎崎牧場の周辺にはリュウキュウチク林が広がり、ところどころに樹木が点在している。これらの調査地点についてはFig-1に示した。種の確認には双眼鏡（8倍）や望遠鏡（20～40倍）を使用し、数種については写真撮影も行った。

今回の調査を行うにあたり、情報提供や調査に協力いただいた中之島小中学校の長崎克則教諭に深く感謝申しあげる。

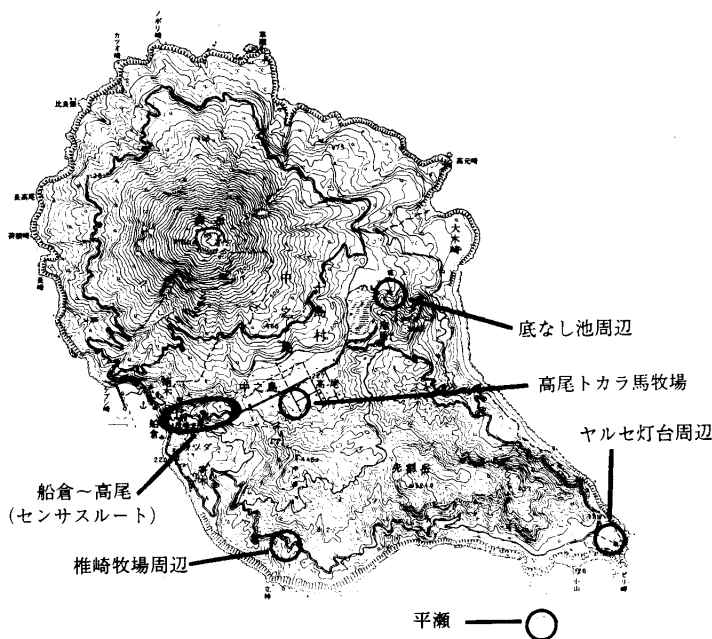


Fig-1 調査地点

2 調査結果および考察

今回の調査では、21科42種（43亜種）を確認した（表1）。センサスルートでは25種（26亜種）、144個体が出現し、このうち種優占率が高かったのは、ヒヨドリ（19%）、アオジ（14%）、シマメジロ（13%）、ハシブトガラス（10%）、ミヤマホオジロ（8%）などの主に群れで行動する種であった。また、これらの種は島内に広く分布していた。このセンサスルートでの出現種のすべてが過去に記録されているが、ハチジョウツグミ（2羽確認）は記録が少ない。

センサスルート以外に次の観察点で新たに17種を確認した。池原の底なし池では、オシドリ7羽、カルガモ10羽、バン1羽、カワセミ1羽をそれぞれ確認した。また、この周辺の照葉樹林においてはオオタカ1羽とハイタカ1羽が観察された。高尾のトカラ馬牧場では、ヒシクイ（亜種ヒシクイ）4羽を記録した。ヒシクイの本県への飛来は珍しく、ごく稀に出水平野などで記録されるにすぎない。トカラ列島では今回初記録となった。常に4羽一緒に行動し、しばしば襲いかかるハヤブサを警戒しながら、イネ科植物の種子や根茎などを食べていた。長崎教諭によると、11月下旬に

Table-1 出現種 (・は、センサスルートでの出現種)

科 名	種 (亜種)	名
カツオドリ科	カツオドリ	<i>Sula leucogaster</i>
ウ科	ウミウ	<i>Phalacrocorax filamentosus</i>
サギ科	クロサギ	<i>Egretta sacra</i>
ガンカモ科	ヒシクイ	<i>Anser fabalis serrirostris</i>
	オシドリ	<i>Aix galericulata</i>
	カルガモ	<i>Anas poecilorhyncha</i>
ワシタカ科	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>
	トビ	<i>Milvus migrans</i>
	オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>
	・ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>
	ノスリ	<i>Buteo buteo</i>
	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>
	・チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>
キジ科	キジ	<i>Phasianus colchicus</i>
クイナ科	バン	<i>Gallinula chloropus</i>
チドリ科	シロチドリ	<i>Charadrius alexandorinus</i>
シギ科	・ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>
ハト科	・カラスバト	<i>Columba janthina</i>
	・キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>
	・ズアカアオバト	<i>Sphenurus formosae</i>
カワセミ科	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>
セキレイ科	・キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>
	・ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>
	・ピンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>
	・タヒバリ	<i>Anthus spinoletta</i>
ヒヨドリ科	・アマミヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis ogawae</i>
モズ科	・モズ	<i>Lanius bucephalus</i>
レンジャク科	・キレンジャク	<i>Bombycilla garrulus</i>
ヒタキ科 (ツグミ亜科)	・ジョウビタキ	<i>Phoenicurus auroreus</i>
	・ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>
	・イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>
	・シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>
	・ツグミ	<i>Turdus naumanni eunomus</i>
	・ハチジョウツグミ	<i>Turdus naumanni naumanni</i>
(ウゲイス亜科)	・リュウキュウウゲイス	<i>Cettia diphone riukiensis</i>
	セッカ	<i>Cisticola juncidis</i>
シジュウカラ科	・アマミヤマガラ	<i>Parus varius amamii</i>
メジロ科	・シマメジロ	<i>Zosterops yaponicus insula</i>
ホオジロ科	・ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>
	・アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>
アトリ科	・アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>
	オオカワラヒワ	<i>Carduelis sinica kawarahiba</i>
カラス科	・ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>
合 計	10目21科42種 (43亜種)	

渡来し、2月下旬まで滞在していたとのことである。この牧場から周辺の農耕地にかけては、冬鳥のオオカワラヒワの群れ(32羽)もみられた。ヤルセ灯台付近のリュウキュウチク林では、セッカ1羽を確認した。セッカは夏期には島内で繁殖し、冬期は移動すると考えられているが、今回の調査で、移動せずに周年生息するものがあることが分かった。ヤルセ灯台に近い牧場で、旅鳥とされるノゴマを1月始めに目撃したとの情報を得たので一帯を調査したが確認できなかった。しかし、前年の2月に、長崎教諭により写真撮影されているので、越冬の可能性は高いと思われる。椎崎牧場ではキジの鳴き声を聞いた。また、牧場上空を帆翔するノスリ1羽とトビ4羽を確認した。平瀬では、約50つがいのカツオドリが巣作りや抱卵中であった。観察した範囲では、幼鳥は確認できなかった。船で平瀬に向かう途中の岩礁では、シロチドリ1羽、ウミウ1羽、クロサギ1羽、ミサゴ1羽およびミサゴの古巣を確認した。

中之島における冬期の鳥類については、トカラ列島学術調査報告書(1991)の中で、川路が22科40種(1988年1月30日～31日調査)、堀が20科37種(1989年2月15日～18日調査)をそれぞれ報告している。今回の調査での出現種21科42種(43亜種)は川路や堀の調査結果とほぼ一致するので、冬期、中之島ではふつう40種前後が生息しているものと考えられる。出現種42種のうち、中之島での繁殖が確認されたり、繁殖の可能性が高いとされる種(森岡, 1990)は、カツオドリ、ウミウ、クロサギ、カルガモ、ミサゴ、トビ、キジ、バン、カラスバト、ズアカアオバト、カワセミ、アマミヒヨドリ、モズ、イソヒヨドリ、リュウキュウウグイス、セッカ、アマミヤマガラ、シマメジロ、ハシブトガラスの19種で、全体の約45%を占めた。このうち、ズアカアオバト、アマミヒヨドリ、リュウキュウウグイス、アマミヤマガラ、シマメジロは、鹿児島県本土には生息していない南西諸島の特産種(亜種)である。残りの23種、約55%は渡り鳥で、県本土でみられる種と大差はなかった。

おわりに

今回の調査は期間が短く、調査域を島の南半分に限定せざるを得なかったが、いくつかの新しい知見が得られた。トカラ列島の冬期の鳥類については、例えば、アカヒゲやアカコッコが冬期にも生息しているのかどうかなど、まだ確証が得られていないことも多い。このような未知の部分が明らかにされるには、継続的な調査が是非とも必要であると思われる。この調査報告がトカラ列島の鳥相解明の一助になれば幸いである。

引用・参考文献

鹿児島県 平成3年 トカラ列島学術調査報告書

森岡 弘之, 1990. トカラ列島の繁殖鳥類とその起源. 国立科博専報, (23): 151-166.

鹿児島県 昭和62年 鹿児島県の野鳥

鹿児島大学野鳥研究会 1989年 トカラ列島中之島における鳥類調査

呉地 正行・横田 義雄・大津真理子 1983. ヒシクイとオオヒシクイの野外識別についての考察. 鳥32 (2/3): 95-108

中之島でみられた鳥類



カツオドリ♂



カツオドリ♀ (抱卵中)



ヒシクイ



ミヤマホオジロ♂



ハチジョウツグミ



シロハラ♀